

氏名	眞鍋大輔
授与した学位	博士
専攻分野の名称	医学
学位授与番号	博乙第 4190 号
学位授与の日付	平成19年6月30日
学位授与の要件	博士の学位論文提出者 (学位規則第4条第2項該当)
学位論文題目	Comparative Study of Oncologic Outcome of Laparoscopic Nephroureterectomy and Standard Nephroureterectomy for Upper Urinary Tract Transitional Cell Carcinoma (上部尿路上皮癌に対する標準的腎尿管摘除術と体腔鏡下腎尿管摘除術における腫瘍学的結果の比較研究)
論文審査委員	教授 吉野 正 教授 木股 敬裕 准教授 猶本 良夫

#### 学位論文内容の要旨

近年、上部尿路癌に対して体腔鏡下腎尿管全摘除術（LNU）が行われるようになってきたが、腫瘍学的結果についての大規模な報告はほとんどない。今回、我々は従来の開放手術による標準的腎尿管全摘除術（ONU）と腎尿管遊離処置を体腔鏡下に行うLNUの腫瘍学的結果について比較検討した。2000年1月から2004年12月の5年間に Okayama Urological Reserch Group にて上部尿路移行上皮癌に対し根治的腎尿管全摘除術が施行された367症例中、遠隔転移、リンパ節転移、膀胱癌既往のない224症例を対象とした。LNUを58例に、ONUを166例に施行し、レトロスペクティブに統計学的解析を行った。膀胱内再発を認めた症例はLNUにおいて19例（32.8%）、ONUにおいては63例（38.0%）であった。局所再発はLNUで1例、ONUで2例認めたのみであった。LNUの局所再発はポート部再発であった。術後遠隔転移はLNUで10例（17.2%）、ONUで33例（19.9%）に認めた。ONUとLNUでは膀胱内再発率、局所再発、遠隔転移いずれにおいても有意差を認めなかった。手術手技による差は認めなかった。LNUは今後、標準的治療法になり得る手術方法と考えられた。

#### 論文審査結果の要旨

本研究は上部尿路癌に対する治療法として施行されている体腔鏡下腎尿管全摘術（LNU）と従来からの標準的腎尿管全摘術（ONU）を比較検討したものである。2000年から2004年の上部尿路癌367症例中遠隔転移、リンパ節転移、膀胱癌の既往のない224例を対象としている。LNUは58例、ONUは166例である。両群間では、膀胱内再発、局所再発、術後遠隔転移のいずれにおいても差はみられなかった。この結果、LNUは今後標準的治療法になりうる可能性が示されている。実験の目的、手法、結果とその解釈とも適切になされており、上部尿路癌の手術法について重要な知見を得たものと評価される。

よって、本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。